

宮城県仙台市方言



宮城県方言区画図

【宮城県の方言区画】宮城県は、南部は福島県、西部は山形県、北部は岩手・秋田県に接している。江戸時代に全域が伊達藩に属し、交通の障害となるような大きな山や川もないことから、県内の方言差は他の都道府県に比べて大きくない。

音声・語彙・文法の面で、事象によって、県境付近には、宮城県一般に分布するものとは異なる、隣接する県と同一のものが分布することがある。

アクセントについては、仙台市を含む県南部は無型アクセント、北部は有型アクセントである。

したがって、方言区画としては、おおよそ仙台市以南の南部と、それ以外の北部と、大きく2つに分けるのが一般的である。

【仙台市方言について】仙台市は宮城県の中央部に位置する。江戸時代から宮城県の政治経済の中心地であり、現在は県庁所在地である。宮城県の方言の全体像を知ろうとする場合、代表として挙げるのは適切と思われる。

宮城県のみならず東北の中心的都市と言われることもあるが、一方で、全国的には「支店都市」という意味合いも強く、東京志向が強いようである。

そのためか、仙台市は全国のほかの大都市と比較しても、各世代で共通語化の進行がはやい。

【表記について】次の基準による。①「イ」と「エ」は互いの中間音で発音されるが、基本的に、イ寄りの発音は「イ」、エ寄りの発音は「エ」で表記する。②「シ／ス」「ジ／ズ」「チ／ツ」の区別がないので、それぞれ「ス」/su/、「ズ」/zu/、「ツ」/cu/で表す。③有声母音に挟まれたカ・タ行音は有声化するが、この現象による濁音の表記は、活用表中では行わない。④いわゆるガ行鼻濁音があるが、表記には反映させず、「ガ」「ギ」「グ」「ゲ」「ゴ」と記す。⑤ザ・ダ・バ行に入り渡り鼻音が現れることがあるが、表記には反映させない。⑥文献からの引用例文では原典の表記にしたがう。⑦アイ・アエの融合に由来する[ɛ(:)]は「エァ」「ケァ」などと表記する。

【調査概要】本稿の記述は、「参考文献」所収の用例のほか、筆者（1966年生まれ、男性、0～25歳仙台市、26～29歳宮城県大崎市、30歳～現在仙台市）の内省と観察による。引用元を記していない用例は作者の内省によるもので、カタカナで表記する。作者の内省によるものについては、1943年生まれで仙台市以外での居住歴がないK氏にも確認した。

例文は、「用例出典」に記載の4点の文献から例文を引用した。[仙台方言]は「宮城県の中、仙台以南の地方に於ける言語を対象としたものである」が、筆者の内省と一致するものを採用する。また、用例は音声記号で書かれ、歴史的仮名遣いの共通語訳が付されているが、本稿で引用するにあたり、カタカナ表記に改め、共通語訳を現代仮名遣いに直した。

[民話][百選]は宮城県内各地で収録されたものであるが、仙台市以外で採録されたものについても、筆者の内省と一致するものを採用し、本文をそのまま引用し、筆者による共通語訳を付す。[せんだい]は仙台市で収録されたものようであるが、これについても、筆者の内省と一致するものを採用し、本文をそのまま引用し、筆者による共通語訳を付す。

宮城県仙台市方言の活用表

《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	スタ
		カクツケ	ミルツケ	クルツケ	スルツケ
		カイタツケ	ミタツケ	キタツケ	スタツケ
	命令	カケ	ミロ	コイ	スロ
		カカイン	ミサイン ミライン	コ キサイン コライン	スサイン スライン
禁止	カクナ	ミルナ	クルナ	スルナ	
	カキスナ	ミンナ	クンナ	スンナ	
		ミスナ	キスナ	ススナ	
意志	カクベ	ミツペ ミンベ	クツペ クンベ	スツペ スンベ	
推量	カクベ	ミツペ ミンベ	クツペ クンベ	スツペ スンベ	
接 続 類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	スタ
	中止	カイテ	ミテ	キテ	ステ
	仮定	カケバ	ミレバ	コレバ	スレバ
		カクト	ミット	クレバ	スト
カイタラ		ミタラ	クット キタラ	スタラ	
継起	カイタツケ カイタラバ カイタレバ	ミタツケ ミタラバ ミタレバ	キタツケ キタラバ キタレバ	スタツケ スタラバ スタレバ	
派 生 類	否定	カカネ	ミネ	コネ	スネ
	丁寧	カキス	ミス	キス	スス
	使役	カカセル	ミサセル	コサセル コラセル	サセル
		カカレル	ミラレル	コラレル	サレル スラレル
	可能	カカレル カクニイー カケル	ミラレル ミンニイー	コラレル クンニイー	《デキル》 スンニイー
		尊敬	(該当形 欠)	(該当形 欠)	《ゴザル》 (該当形 欠)
	継続	カイトル	ミテル	キテル	ステル
		カイツタ	ミッタ	キッタ	スタ
	希望	カキテー	ミテー	キテー	ステー
のだ	カクンダ	ミルンダ	クンダ	スンダ	

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」。
g	研ぐ tog・u	トイ-ダ	gをiにする。 -タが-ダになる。
s	出す das・u	ダス-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac・u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	スン-ダ	nをN(撥音)にする。 -タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。 -タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。 -タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
w/o	買う ka(w)・u	カッ-タ	wをQ(促音)にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生(だ)
終 止 類	断定非過去	アカイ アケァ	スズカダ	ガクセーダ
	断定過去	アカカッタ アケァカッタ アカイッケ アケァッケ	スズカダッタ スズガダッケ	ガクセーダッタ ガクセーダッケ
	推量	アカイベ アケァベ	スズカダベ	ガクセーダベ
接 続 類	連体非過去	アカイ アケァ	スズカナ	《ガクセーノ》
	連体過去	アカカッタ アケァカッタ	スズカダッタ	ガクセーダッタ
	中止	アカクテ アケァクテ	スズカデ	ガクセーデ
	仮定	アカケレバ アケァケレバ アカイト アケァト アカカッタラ アケァカッタラ	スズカダラ スズガダラバ スズカダト スズカダッタラ	ガクセーダラ ガクセーダラバ ガクセーダト ガクセーダッタラ
派 生 類	否定	アカクネ アケァクネ	スズカデネ	ガクセーデネ
	なる	アカクナル アケァクナル	スズカニナル	ガクセーニナル
	丁寧	アカイガス アケァガス	スズカデガス	ガクセーデガス
	のだ	アカインダ アケァンダ	スズカナンダ	ガクセーナンダ

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」と基幹一段型(以下「一段型」)がある。おおよそ、多段型には a 類(「書く」・「居る」・「死ぬ」類)動詞、一段型には b 類(「見る」・「起きる」・「開ける」類)動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ段の4形、および、音便形がある。「カク」(書く)の場合、カカネ(kak・a-ne)、カキス(kak・i-su)、カク(kak・u)、カケ(kak・e)、カイタ(kai-ta; さらに有声化してカイダ kai-da)など。また、語幹末子音には、k(カ行)、g(ガ行)、s(サ行)、t(タ行)、n(ナ行)、b(バ行)、m(マ行)、r(ラ行)、w(ワ行)がある。

一段型には、ミル(mi-ru)、オキル(oki-ru)など基幹がイ段の動詞と、ネル(ne-ru)、アケル(ake-ru)など基幹がエ段の動詞がある。一段型の動詞は「ミル」を例にすると、断定非過去形ミル(mi-ru)、仮定形ミレバ(mi-reba)、受身形ミラレル(mi-rareru)、可能否定形ミランネ(mi-raNne)でrで始まる接辞が付き、多段型のr語幹動詞に対応した形になる。

不規則な活用をする動詞に「クル」(来る)と「スル」(為る)がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キタ(k・i-ta)、クル(k・u-ru)、コイ(k・o-i)などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段に、「スル」は、サレル(s・a-reru)、スタ(s・u-ta)、スル(s・u-ru)、などのように、基幹が「サ」「ス」の2段にわたる。なお、「スル」の基幹「ス」にはイ段「シ」に由来するものが交じる。当該方言では「シ」と「ス」の区別がなく、いずれも「ス」に近く発音される。

接辞や助詞が付くと、語末のウ段音節は、後続音によって促音化・撥音化することがある。語末が「ル」のものは、後続音がカ行音、タ行音、パ行音の場合は促音便化、後続音がナ行音、バ行音の場合は撥音便化する。多段型で語末が「ク」のものは、後続音がカ行音の場合は促音便化する。音便化については、関連する箇所でも適宜ふれる。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

断定非過去形は、多段型は基幹ウ段形の「カク」など、一段型は基幹(=語幹)に「ル」を付けた「ミ

ル」など、不規則な活用の「来る」「する」は基幹「ク」「ス」に「ル」を付けた「クル」「スル」となる。ただし、多段型動詞「行く」は、後続音がカ行音の場合促音便化または撥音便化する。当該方言において、「行く」のクは、有声化する際、[gu]だけでなく鼻濁音[ŋu]になることもある。鼻濁音[ŋu]がさらに撥音便化するのだと思われる。

- ・フデデ ナマエバ カグ。(筆で名前を書く。)
- ・ソゴサ カツカラ。(そこに書くよ。)
- ・オレモ スグ {イグガラ/イツカラ/インカラ}。(おれもすぐ行くよ。)
- ・エーガバ ミル。(映画を見る。)
- ・ほんでえ、おれも飲んでみっから、食ってみっから。(それでは、おれも飲んでみるから、食ってみるから。)[民話：旅はまたたび]
- ・キ キツカラ。(木、切るよ。)
- ・キョーフ マゴ クル。(今日は孫が来る。)
- ・アスタワ タウエ スル。(明日は田植えをする。)

上の例の「カラ」は、当該方言では理由を表すのではなく、軽い強調を表す。共通語の「よ」に相当する。

〈断定過去形〉

断定過去形には「タ」「ツケ」「タツケ」の3種類の形の形がある。

「タ」「タツケ」は、多段型動詞では基幹音便形、一段型動詞では基幹に、「来る」ではイ段形「キ」「スル」では「ス」に付く。「タ」と比べると、「タツケ」は、過去のことをただ表現するだけでなく、初めて知ったこと、意外に感じたことについて、他人に伝えるような文脈で使われやすい。

「タ」が上に付かない「ツケ」は、断定非過去形に付く。「タツケ」と同様に、「ツケ」も、「タ」と比べると、過去のことをただ表現するだけでなく、初めて知ったこと、意外に感じたことについて、他人に伝えるような文脈で使われやすい。

- ・昔から広瀬川にはたくさんの淵があってナ、水グモだの大ウナギだの、いろんな主がすんでおった。[せんだい：広瀬川の主のはなし]
- ・毎日、山さ行っては、狐だの狸だのを取ってくらしていたつけど。(毎日、山に行っては、狐だの狸だのを取って暮らしていたという

ことだ。) [せんだい：あかりをねらえ]

- ・トナリノ ズンツァ イソイデ イグツケ。
(隣の爺さんが急いで行った。) [仙台方言]

また、「タ」は過去でなく、現在のことを表すこともある。例えば、他人の家を訪問する際、訪問する側の「イダガ」(居るか)という呼びかけに対し、訪問された側が「イダヨ」(居るよ)と返答する用法がある。

〈命令形〉

命令形は、多段型動詞はエ段形の「カケ」など、一段型動詞は基幹に「ロ」を付けた「ミロ」など、「来る」は「コイ」「コ」、「する」は「スロ」となる。

- ・こっちゃこ。(こちらへ来い。) [百選：見るなの花座敷]

「イン」「サイン」「ライン」が付くと、丁寧な命令の形になる。多段型動詞はア段形に「イン」、一段型動詞は基幹に「サイン」または「ライン」が付く。「来る」は「キサイン」または「コライン」、「する」は「スサイン」または「スライン」となる。

- ・オンツァン コイズ イー サゲダガラ ノマイン。(叔父さん、これは良い酒だからお飲み下さい。) [仙台方言]
- ・魚とりおしえっから、狐どの、ほの川の中さ尻尾を入れさいん。(魚とりを教えるから、狐どの、その川の中に尻尾を入れて下さい。)
[民話：狐と川瀬]

〈禁止形〉

禁止形は、「断定非過去形+ナ」が使われる。「ナ」の直前の「ル」は撥音化することが多い。

- ・コゴサワ ナニモ カグナ。(ここには何も書くな。)
- ・ハゴノ ナガワ {ミルナ/ミンナ}。(箱の中は見るな。)
- ・モー コゴサワ {クルナ/クンナ}。(もうここには来るな。)
- ・モー ソンナゴド {スルナ/スンナ}。(もうそんなことするな。)

丁寧な禁止の形として、後述の丁寧形「ス」に「ナ」を付けた形がある。

- ・アツチャ イギスナ。(あっちに行かないでください。)
- ・アンマリ ズロズロ ミスナ。(あまりじろじ

ろ見ないでください。)

- ・コツチャ キスナ。(こっちに来ないでください。)
- ・ソイナゴド ススナ。(そんなことしないでください。)

〈意志形〉

意志形は、「断定非過去形+ベ」が使われる。「ベ」の直前の「ル」が撥音化することがある。また、「ル」が促音化して、「ベ」でなく「ペ」となることがある。相手に対する勧誘を表すこともある。

- ・アスタモ マヅリ ミサ イグベ。(明日も祭見に行こう。)
- ・しかたねえがら、町さ用たしき行っ人ばだましてやっぺど思っ、道路っ端さ出はったんだど。(仕方ないから、町に用事で行った人をだましてやろうと思って、道路の端にでただって。)
[民話：狐と川瀬と猿の食いもの集め]
- ・力くらべするべ。(力くらべをしよう。)
[せんだい：弁慶石と義経石]
- ・ハヤグ スゴド {スルベ/スンベ/スッペ}。(早く仕事をしよう。)

〈推量形〉

推量形は意志形と同じで「断定非過去形+ベ」が使われる。撥音化・促音化については、意志形と同じである。

- ・アスタハ タブン アメ フッペ。(明日は多分雨が降るだろう。)
- ・アイヅモ ソロソロ {クルベ/クンベ/クッペ}。(あいつもそろそろ来るだろう。)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、断定非過去形と同形である。

- ・トリコ トル シト (小鳥を取る人) [仙台方言]
- ・今度あ帰ってくつときは、赤い着物と帯と買ってくつから。(今度帰ってくるときは、赤い着物と帯と買ってくるから。)
[民話：鳥になった子]

〈連体過去形〉

連体過去形は、「タ」が使われる。

- ・コンド タデダ アンダイ テースタ モンダナ。(今度建てたあなたの家は大したもん

だな。)

- ・キノー ムスコ ヤット ケツテ キタ。(昨日息子がやっと帰って来た。)
- ・ケサ ニワノ クサドリ スタ。(今朝庭の草取りをした。)

〈中止形〉

中止形は「テ」が使われる。多段型は基幹音便形に、一段型は基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「ス」にテを付ける。

- ・あーん、おれこの舟つくって、海さ行って魚とるんだや。(あー、おれはこの舟をつかって、海に行つて魚をとるんだよ。)[民話：かちかち山]

〈假定形〉

「バ」「ト」「タラ」「コッタラ類」がある。

「バ」は多段型動詞のエ段形に付く。一段型動詞および「来る」「する」では「基幹+レバ」となる。

- ・アスタ アメ フレバ フネ デネベ。(明日雨が降れば船は出ないだろう。)
- ・アスタ {コレバ/クレバ} ナントガ ナッペ。(明日来れば何とかなるだろう。)

「ト」は断定非過去形に付く。直前がルのときは促音化することがある。

- ・アスタ アメ フット ヤンダナ。(明日雨降ると嫌だな。)
- ・アノ エ ミット ムガスノ ゴド オモイダス。(あの絵を見ると昔のことを思い出す。)
- ・アスタモ アノスト クット イーナ。(明日もあの人に来るといいな。)

「タラ」は、多段型動詞では基幹音便形、一段型動詞では基幹、「来る」ではイ段形「キ」、「する」では「ス」に付く。

- ・アスタモ ハレダラ イーナ。(明日も晴れたらいいな。)
- ・アンダモ キタラ イーッチャ。(あなたも来たらいいよ。)
- ・コイナグ スタラ ナジョダベ。(このようにしたらどうだろう。)

活用表には載せなかったが、「コッタラ類」は共通語の「(の)なら」に対応するもので、過去形「タ」にも付く。

- ・アンダ イグゴッタラ オレモ イグ。(あん

たが行くのなら俺も行く)

- ・アンダ イッタゴッタラ オレワ イガネ。(あんたが行つたのなら俺は行かない。)
- ・ソツツガ ソー スッコッタラ コツツモ ソースッカラ。(そっちがそうするならこっちもそうするよ。)
- ・ソツツガ ソー スタゴッタラ コツツモ ソー スッカラ。(そっちがそうしたのならこっちもそうするよ。)

〈継起形〉

従属節の事態が起こると主節の事態が起こる、つまり継起的接続を表すとき、「タツケ」「タラバ」「タレバ」を用いる。多段型動詞の基幹音便形、一段型動詞の基幹、「来る」は「キ」、「スル」は「ス」に付く。「タツケ」について、共通語にない用法であると認識していない話者が多く、若い世代でも盛んに使われる。

- ・やつとこすつとこ追つついたつ、白あなに、田んぼの中さべつちやり入つていだつおん。(やつとのことで追いついたところ、白はなに、田んぼの中でべつちやり入つていたということだ。)[民話：猿と蟹]
- ・ゴズニ キタツケ モウ オマヅリワ オワツテダ。(5時に来たらもうお祭は終わつていた。)
- ・スバラグブリデ ウンドー スタツケ ツカレダ。(しばらくぶりで運動したら疲れた。)
- ・ビッキが日なたぼっこしてたつ、猿が来たつと。(蛙が日なたぼっこしてつたところ、猿が来たということだ。)[せんだい：猿と蛙の餅争い]
- ・おっかなくて、おっかなくて二人でふるえていたら、「小僧、小僧、いたかーっ」と、大きなど(入道)坊主が入つてきた。(こわくて、こわくて二人でふるえていたら、「小僧、小僧、いるかーっ」と、大きな入道坊主が入つてきた。)[せんだい：梨の精]
- ・そのついでに塩釜の港さ寄つたら、まだ見だごどもねえでつかけい魚があがつていたんだど。(そのついでに塩釜の港に寄つたところ、まだ見たこともないでつかけい魚があがつていたということだ。)[せんだい：丸

潰と半殺]

- ・息を吹きかげたれば、もとの体に返ったと。
(息を吹きかけたところ、もとの体に返った
そうだ。) [民話：千貫目太郎]
- ・竜宮さ行ってみだれば、一の門、二の門、三
の門があって、笛太鼓でお姫様だちは舞をま
って、それはそれは楽しい、毎日だったと。
(竜宮に行ってみたところ、一の門、二の門、
三の門があって、笛太鼓でお姫様たちは舞を
まっ、それはそれは楽しい、毎日だったと
いうことだ。) [民話：猿の生き肝]
- ・海辺さ来たれば、ちょうど猿っこが木のぼり
して遊んでたから、「猿さん、猿さん、なに
してだの」と聞いたんだど。(海辺に来たと
ころ、ちょうど猿が木のぼりして遊んでいた
から、「猿さん、猿さん、なにしていたの」、
と聞いたということだ。) [民話：猿の生き肝]

〈否定形〉

否定形は、多段型動詞はア段形に、一段型動詞は
基幹に、「来る」は「コ」に、「する」は「ス」に、「な
い」の連母音が融合した「ネ」または「ネア」を付
ける。否定形自体は、形容詞と同じ活用をする。

- ・ソンドモ コリネ。(それでも懲りない。) [仙
台方言]
- ・マダ ダレモ コネア。(まだ誰も来ない。)

〈丁寧形〉

丁寧形は、多段型動詞はイ段形に、一段型動詞は
基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「ス」に「ス」
を付ける。

- ・アシタ ソツツサ イギス。(明日そっちに行
きます。)

共通語の「ません」にあたる、丁寧形の否定形は、
「ス」のかわりに「イン」を付ける。「する」には「イ
ン」を付けにくく、かわりに「やる」を使うことが
多いようである。下の例の「わがりいん」は動詞「わ
かる」に「イン」を付けたもので、「いけません」と
いう禁止表現となっている。

- ・兄つあん、兄つあん、あんだの好きなものは、
あれ、何時でも出してやっから、こいつ持つ
て来たりなんだりしては、わがりいん。(兄
さん、兄さん、あんだの好きなものは、あれ、
いつでも出してやるから、これを持って来る

などしては、いけません。) [民話：海の水は
なぜ塩っぱいか]

- ・誰も来いん。(誰も来ません。) [民話：松ぶさ
ぶどう採り]
- ・オラ、ヤリイン。(わたしはやりません。)

〈使役形〉

使役形は、多段型動詞はア段形に、「する」は「サ」
にそれぞれ「セル」を付ける。一段型動詞は基幹に
「サセル」、「来る」は「コ」に「サセル」「ラセル」
を付ける。これらは一段型動詞と同じ活用をする。

- ・ワラスヌ ナマミズ ノマセンナヨ。(子供に
生水を飲ませるなよ。) [仙台方言]
- ・コンドノ ヤスミヌデモ ヨバツテ イヅロ
ード ツロー オラエサ コラセッカ。(今
度の休みにでも呼んで、一郎と二郎とを、お
れの家に来させるか。) [仙台方言]

〈受身形〉

多段型動詞はア段形に「レル」を付け、一段型動
詞は基幹に「ラレル」を付ける。「来る」は「コ」に
「ラレル」を、「する」は「サ」に「レル」を付ける
か、「ス」に「ラレル」を付ける。一段型動詞と同じ
活用をする。

- ・シトヌ オサレデ コロンダ。(人に押されて
転んだ。) [仙台方言]
- ・ソノ テガミ シトヌ ミラレデモ イーガ。
(その手紙人に見られても良いか。) [仙台方
言]
- ・猿のごったがら、なぞにすられるんだが、お
っかなくて、おっかなくて泣いたんだ。(猿
の(する)ことだから、どのようにされるの
か、こわくて、こわくて、泣いていたんだ。)
[民話：雉子と猿]

後に「テ」「タ」などが付くと、「レ」が促音化す
ることがある。

- ・イヅマンエンサツバ ダサツテ ツリ ネガ
ツタ。(一万円札を出されて釣りがなかった。)
- ・コッソリ サゲッコ ノンデットゴ ミラ
ツタ。(こっそり酒を飲んでいるところを見ら
れた。)

〈可能形〉

能力可能と条件可能の区別はない。多段型動詞は
ア段形に「レル」を付ける。一段型動詞は基幹に、

「来る」は「コ」に、「する」は「ス」に「ラレル」を付ける。「レル」「ラレル」は一段型動詞と同じ活用をする。また、断定非過去形に、助詞「に」と形容詞「良い」とからなる「ニー」を付ける形もある。これは形容詞と同じ活用をする。ただし、否定形になることはまずない。断定非過去形の末尾がルの場合、「ミンニー」などのようにルが撥音化することがある。さらに、多段型動詞については、「カケル」などの、一段型になった、いわゆる可能動詞の形も使う。

- ・つるり、つるりって、ころんだりばかりして歩がんねぐなつたんだって。(つるり、つるりと、ころんだりばかりして歩けなくなったんだって。)[民話：雉子と猿]
- ・はあー、今度あ狸の野郎の茅背負つてだの、降ろすに降ろさんね。(はー、今度は狸の野郎が茅を背負っていたのを、降ろすに降ろせない。)[民話：かちかち山]
- ・とつても返事すらんねがたつた。(とても返事できなかつた。)[民話：狐と川獺]
- ・おれはまだまだ、あるぐにいいがら。(おれはまだまだ、歩けるよ。)[民話：花咲か爺]
- ・フグ キルニイグナツタ。(服が着られるようになった。)

なお、「レル」「ラレル」は自発の意味で使われることもある。ただし、「アズダス」(案じ出す。「思い出す」の意)、「アンズル」(案ずる)といった思考動詞に付いて、意図しないのにある種の気持ちが起こる、というような意味を表す場合にのみ使われる。

- ・ズスンノ ドギノ ゴド アズダサレル。(地震のときのことが思い出される。)
- ・ビョーヌンノ ゴド アンズラレル。(病人の事が案じられる。)[仙台方言]

〈尊敬形〉

文法的に作られる尊敬形は一般的に使われない。「来る」「行く」「居る(いる)」の意の尊敬語に「ゴザル」がある。ほかに、「オンナイン」という表現がよく使われるが、これは「御成る」(おんなる)という、「来る」の尊敬語がもとになっている。

- ・コッチャ {ゴザイン／オンナイン}。(こちらへおいでください。)

〈継続形〉

継続形は、「ている」「ていた」からきた、「テル」「テタ」が付く。多段型動詞では基幹音便形、一段型動詞では基幹、「来る」は「キ」、「する」は「ス」に付く。

「テル」は、否定の場合は「カイトネ」「ミテネ」「キテネ」「ステネ」、推量の場合は「テル」の「ル」が促音化して「ペ」が付く、「カイツッペ」「ミテツッペ」「キテツッペ」「ステツッペ」などになる。

「テタ」は「テ」が促音化して「ツタ」となり、「カイツツタ」「ミツツタ」「キツツタ」「スツタ」のようになる。ただし、「飲む」「死ぬ」など、基幹音便形で撥音のものは、音便形に「タ」が付いて「ノンタ」「スンタ」のようになる。「テタ」は、過去のことだけでなく、現在のことについて表現する場合もある。

- ・ほんでも雉子、おつかねくて、「けんけーん ほろほろ けんけーん ほろほろ」って泣いたんだって。(それでも雉子は、こわくて、「けんけーん ほろほろ けんけーん ほろほろ」と泣いていたんだって。)[民話：雉子と猿]
- ・狸、家つあ帰つてうんやらうんやらうなつて寝たつたど。(狸は、家に帰つて、うんうんうなつて寝ていたということだ。)[民話：かちかち山]
- ・扉は、やっぱり戸口にいで、猿入つてくる位だけ、戸、開けつたんだって。(扉は、やっぱり戸口にいて、猿が入つてくる位だけ、戸を開けていたんだって。)[民話：雉子と猿]
- ・イマ オギヤクサン キツタガラ マダ キテケサイン。(今お客さん来ているから、また来て下さい。)
- ・なにしつたんだ。(何を{しているんだ/いたんだ。})[民話：屁つたれよめご]
- ・ヘヤデ ホン ヨンタ。(部屋で本を{読んでいる/読んでいた。})
- ・イゲノ サガナガ スンタ。(池の魚が{死んでいる/死んでいた。})

〈希望形〉

希望形は、多段型動詞はイ段形に、一段型動詞は基幹に、「来る」は「キ」、「する」は「ス」に「タイ」を付ける。

- ・てつとり早く見てえなら、歴史民俗資料館さ

行けばお目にかかれるよ。(てっとり早く見たいなら、歴史民俗資料館に行けばお目にかかれるよ) [せんだい：竈神さん]

〈のだ形〉

連体非過去形に「ンダ」を付ける。連体過去形に「ンダ」を付けて「～たのだ」にあたる形を作ることでもできる。

- ・オライノ ムスコワ アヅクテモ サムクテモ トニカグ マイニヂ ガッコウサワ イグンダ。(うちの息子は暑くても寒くてもとにかく毎日学校には行くんのだ。)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の活用型は1つである。

本稿冒頭の「表記について」に記したように、当地では連母音アイ、アエにあたるものは、融合してエア [ɛ(:)] となり、形容詞の断定・連体非過去形でもそれが適用される。ただし、特に若い世代ではエ[e] となることも多く、語によってエアよりエになりやすいものもある。語幹末がウ・オの形容詞も語によっては融合することがある。

- (例) アカイ (赤い) →アケ、アケァ
 アマイ (甘い) →アメ、アメァ
 クサイ (臭い) →クセ、クセァ
 ショッパイ (しょっぱい)
 →ショッペ、ショッペァ
 ナイ (無い) →ネ、ネァ
 サムイ (寒い) →サミ
 ワルイ (悪い) →ワリ
 スゴイ (すごい) →スゲ、スゲァ
 ツヨイ (強い) →ツエ、ツエァ

さらに、いわゆる形容詞の不活用化(融合後の形の語幹化)が起こり、「アカイ」「ワルイ(悪い)」「ツヨイ(強い)」を例にすると、〈断定過去形〉〈連体過去形〉で「アゲガッタ」「ワリガッタ」「ツエガッタ」、〈中止形〉で「アゲクテ」「ワリクテ」「ツエクテ」、〈否定形〉で「アゲグネ」「サミグネ」「ツエグネ」などとなる。ただし、アイ、アエ以外の連母音の融合と不活用化は、規則的ではない。

- ヒクイ (低い) →×ヒキ
- オモイ (重い) →×オメ、×オメァ

〈断定非過去形〉

語幹にイ(またはエ)を付ける。上記のように、一部の語では語幹末母音とイ(エ)との融合が起こる。

- ・キョーワ イギナリ アヅエ。(今日は大変暑い。)

〈断定過去形〉

断定過去形は、語幹に「カッ-タ」が付く。あるいは、断定非過去形に「ツケ」が付く。「カッ-タ」と比べると、「ツケ」は、過去のことをただ表現するだけでなく、初めて知ったこと、意外に感じたことについて、他人に伝えるような文脈で使われやすい。

- ・おれが悪がった。(わたしが悪かった。)[百選：肉付き面]
- ・アノ ツグエ ケッコー オモイツケ。(あの机けっこう重かった。)
- ・アノヒト ケッコー ハسنノ ハエツケ。(あの人、けっこう、走るの速かった。)

〈推量形〉

推量形は、断定形に「べ」を付ける。過去形「タ」にも「べ」が付く

- ・コイナグ スレバ イーべ。(このようにすればいいだろう。)
- ・(炎天下で働いている人を冷房の効いた部屋の中から窓越しに見て) アヅイベナー。(暑いだろうなあ。)
- ・(過去にある人が熱帯の地方に住んでいたということを間接的に聞いて) アヅガッタベナー。(暑かっただろうなあ。)

なお、推量形において、

- ・なじよすたら良がんべ。(どのようにしたら良いだろう)[百選：分別八十八]

のような、文語のかり活用に由来する形式は、民話集には用例としてあるが、現在は使われなくなっているようである。したがって、活用表からは除外した。

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同じ形である。

- ・唐の国の山ん中に、お前より強い者がいるから、その人捜すてげ。(唐の国の山の中に、お前より強い者がいるから、その人を捜していけ。)

- ・その家には不思議な花あって、男来れば赤え男花、女来れば白え女花、人数分咲ぐんだど。
(その家には不思議な花があつて、男が来れば赤い男花、女が来れば白い女花が、人数分咲くのだそうだ。)[百選：人影花]

〈連体過去形〉

連体過去形として断定過去形と同形の「タ」を使う。「ツケ」は使わない。

- ・アノ チャッコガッタ コドモモ モー ハダヅダヨワ。(あの小さかった子供ももう二十歳だよ。) ※ちやつこい=小さい

〈中止形〉

中止形は、語幹に「クテ」を付ける。

- ・昭和のはじめのころまで、仙台で「花淵昆布」ともてはやされた、波の帯のように重くてねっとりしたうまい昆布があった。[せんだい：昆布の種]

〈仮定形〉

仮定形は、語幹に「ケレバ」を付ける形、断定非過去形に「ト」を付ける形、語幹に「カッタラ」を付ける形がある。

- ・モット {アッタガレバ／アッタケード／アッタガガッタラ} イーネ。(もつと暖かければいいね。)
- ・ああ、こつたな所でも良かったら、何もねえども泊まれや。(ああ、こんな所でも良かったら、何もないけれども泊まれ。)[百選：蛙女房]

ほかにも、「コッタラ類」を付ける形がある。「コッタラ類」は共通語の「(の)なら」に対応するもので、過去形「タ」にも付く。

- ・アンダガ イーゴッタラ ソンデ イガス。(あなたがいいのならそれでいいです。)
- ・アンダガ イガッタゴッタラ ソンデ イガス。(あなたがよかったのならそれでいいです。)

〈否定形〉

語幹に「ク」、さらに「ネ」を付ける。

- ・さびしぐね。(さびしくない。)[せんだい：盗っ人神さん]

〈なる形〉

語幹に「ク」さらに「ナル」を付ける。

- ・鳥は嬉すぐなつて、ツブ食うの止めで、木さ戻つてつたど。(鳥は嬉しくなつて、たにしを食べるのを止めて、木に戻つていったそうだ。)[百選：ツブと鳥の歌問答]

〈丁寧形〉

断定非過去形に「ガス」を付ける。「のだ」の丁寧形にあたるものとして「ンデガス」もある。否定の場合は、語幹に「ク」、さらに「ガイン」または「ネンデガス」を付ける。下の例の「わかんねがす」は動詞「わかる」の否定形「ワカンネ」の丁寧形にあたるもので、ここでは前接する「～て」とともに全体で「～てはいけません」という禁止表現となっている。

- ・そこさ行つて、いたずらしてわかんねがすと。
(そこに行つて、いたずらしてはいけませんよ)[せんだい：ツアー ツアー]
- ・モ インデガス。(もういいんです。)
- ・キョーワ サムグガイン。(今日は寒くありません。)
- ・ホンデワ イグネンデガス。(それでは良くないのです。)

〈のだ形〉

連体非過去形に「ンダ」を付ける。連体過去形に「ンダ」を付けて「～たのだ」にあたる形を作ることできる。

- ・アノヒトワ クンノ イッツモ ハエンダ。
(あの人は来るのいつも早いんだ。)
- ・アノヒトワ クンノ イッツモ ハエガッタ
ンダ。あの人は来るのいつも早かつたんだ。)

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形〉

断定非過去形は形容名詞・名詞とも「ダ」を付ける。

- ・コノ アダリハ ヒルモ スズガダ。(このあたりは昼も静かだ。)
- ・こいつはふしぎだ。(これはふしぎだ。)[せんだい：ツアー ツアー]
- ・タローワ マダ ガクセーダ。(太郎はまだ学生だ。)

〈断定過去形〉

形容名詞・名詞とも「ダッタ」「ダツケ」を付ける。「ダッタ」と比べると、「ダツケ」は、過去のこ

とをただ表現するだけでなく、初めて知ったこと、意外に感じたことについて、他人に伝えるような文脈で使われやすい。

- ・アノコロワ マダ スズガダッタ。(あのころはまだ静かだった。)
- ・モー ヨルダガラ ミンナ スズガダツケ。(もう夜だからみんな静かだった。)
- ・アンドギワ マダ ガクセーダッタ。(あのときはまだ学生だった。)
- ・チョーサニ キタノワ ガクセーダツケ。(調査に来たのは学生だった。)

〈推量形〉

形容名詞述語・名詞述語とも「断定非過去形+ベ」を使う。過去のことについては、「断定過去形+ベ」を使う。

- ・アノ ヘヤワ キョーモ スズガダベ。(あの部屋は今日も静かだろう。)
- ・タブン ヨルワ アメダベ。(多分夜は雨だろう。)

〈連体非過去形〉

形容名詞述語では「ナ」を付ける。名詞述語では「ノ」を付ける。

- ・ホイヅワ コナイダノ スズガナ バンノゴドダ。(それはこの間の静かな夜のことだ。)
- ・ガクセーノ ヒトワ タダデ イガス。(学生の人はただでいいです。)

〈連体過去形〉

形容名詞述語・名詞述語とも断定過去形と同じ「ダッタ」を使う。

- ・アノ マエ スズガダッタ ヒトガ コンダイラグ ウルセクテ シンヤマスタ。(あの前静かだった人が今度大変うるさくて難儀した。)
- ・ガクセーダッタ ドギワ キラグデ イガッタ。(学生だったときは気楽で良かった。)

〈中止形〉

「デ」を付ける。

- ・キョーワ ミンナ デガゲデ スズガデ イナー。(今日はみんな出かけて静かではないなあ。)
- ・アノコロワ ガクセーデ ビンボーダッタ。(あのときは学生で貧乏だった。)

〈仮定形〉

「ダラ」「ダラバ」「ダト」「ダツタラ」のいずれかを付ける。

- ・モット {スズガダラ/スズガダラバ} コゴサ スムンダゲントネ。(もっと静かならここに住むのだけれどね。)
- ・モス {ガクセーダラ/ガクセーダラバ} ヤスグスツカラ。(もし学生なら安くするよ。)
- ・ソソナニ スズガダド カエツテ ウスキミワリーナヤ。(そんなに静かだとかえって薄気味悪いね。)
- ・アイデガ ガクセーダド インマグネナ。(相手が学生だとよくないな。)
- ・モス スズガダツタラ ネデッカシャーネーガラ ヨース ミデ ケライン。(もし静かだったら寝ているかもしれないから様子を見てください。)
- ・モス ガクセーダツタラ ヤスグ ウツテヤツテ ケライン。(もし学生だったら、安く売ってやってください。)

ほかに、活用表には載せなかったが、「コツタラ類」を付ける形がある。「コツタラ類」は共通語の「(の)なら」に対応するもので、過去形「タ」にも付く。

- ・ガクセーダゴツタラ モット ベンキョースロ。(学生ならもっと勉強しろ。)
- ・イッチューノ ガクセーダツタゴツタラ スーガグノ ヤマダ センセバ スツテツカ。(一中の学生だったのなら、数学の山田先生を知っているか。)

〈否定形〉

「デネ」または「デガイン」を付ける。

- ・マダ シズガデネ。(まだ静かでない。)
- ・モー ガクセーデネ。(もう学生でない。)

〈なる形〉

「ニナル」を付ける。

- ・ヤット シズガニナツタ。(やっと静かになった。)
- ・スガツカラ ダイガクセーニナル。(4月から大学生になる)

〈丁寧形〉

丁寧形は「デガス」を付ける。さらに丁寧な形と

して、「デゴザリス」もある。否定の場合は「デガイ
ン」「デゴザリイン」を付ける。

- ・だめでがす。(だめです。)[せんだい：ツァー
ツァー]
- ・ここが私の家でがす。(ここが私の家です。)
[せんだい：ツァー ツァー]
- ・ソノヘヤハ シズガデガイン。(その部屋は静
かではありません。)
- ・モー ガクセーデガイン。(もう学生ではあり
ません。)

〈のだ形〉

「のだ」に相当するものとして、「ナンダ」を付け
る。

- ・アノヒトワ イツツモ シズガナンダ。(あの
人はいつも静かなんだ。)
- ・オライノ ムスコワ マダ ガクセーナンダ。
(うちの息子はまだ学生なんだ。)

用例出典

仙台方言：佐藤忠雄(1981)『仙台方言攷 一音韻と
語法一』溪聲出版

民話：宮城県文化財保護協会(1988)『宮城県文化財
調査報告書第130集 宮城県の民話一民話伝承調
査報告書一』宮城県文化財保護協会

百選：佐々木徳夫(2006)『みやぎ昔ばなし百選一「月
の夜ざらし」ほか一』本の森

せんだい：せんだいむかしばなし編集委員会(1989)
『せんだいむかしばなし』宝文堂

参考文献

飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一(編)(1982)『講座
方言学4一北海道・東北の方言一』国書刊行会

東条操(監修)(1961)『方言学講座第二巻一東部方
言一』東京堂

宮城県史編纂委員会(1960)『宮城県史 20一民俗II
一』宮城県史刊行会

平山輝男(編集代表)(1992)『現代日本語方言大辞
典』明治書院

(武田 拓)